

演 題 名：と畜場に搬入された豚のサルモネラ保菌状況および薬剤感受性

発 表 者 名：○大兼英子 玉城正幸 大野明美

発表者所属：中央食肉衛生検査所

1. はじめに

平成 19 年度から当所が参加している厚生労働省科学研究事業の「豚の食肉処理の高度衛生管理に関する研究」では、豚の処理工程における重要な危害としてサルモネラを設定している。そこで、と畜場に搬入された豚のサルモネラ汚染の実態把握のために盲腸便における保菌状況、枝肉・と体の拭き取り検査、分離株の薬剤感受性試験を実施したので概要を報告する。

2. 材料及び方法

平成 19 年 11 月から 20 年 10 月に、管内と畜場に搬入された豚 250 頭 (79 農場) の盲腸便、60 頭 (23 農場) の枝肉および 50 頭 (9 農場) のと体をふき取り、研究班で指定された方法によりサルモネラの分離を行った。枝肉は内臓出し直後の骨盤腔及び胸骨割面、と体は放血直後の腹部及び肛門周囲部を拭き取り部位とした。分離菌の血清型別及び薬剤感受性試験は秋田県健康環境センターにおいて実施した。薬剤感受性試験は ABPC、CAZ、CET、CFPM、CFX、CTX、FOM、IPM、KM、NFLX、TC、GM の計 12 種類のセンシディスクを用いて KB 法により実施し、*S. Typhimurium* (以下 *S.T*) と同定された株については definitive phage type 104 (以下 DT104) の確認のため、3 薬剤 (SM、CP、SX) を追加し、さらに DT104 特異遺伝子の検出を PCR 法で実施した。

3. 結果

盲腸便では 15 農場 (19.0%) の 17 頭 (6.8%) から 7 種類の血清型のサルモネラ 18 株が分離され、*S. Weltevreden* (以下 *S.W*) が最も多く 5 頭 (29.4%)、*S. Mbandaka* (以下 *S.M*) 及び *S. Derby* (以下 *S.D*) が 4 頭 (23.5%) であった。枝肉は 1 頭 (1.6%) から 1 種類の血清型 *S. Choleraesuis* (以下 *S.C*) が、と体からは 4 農場 (44.4%) の 11 頭 (22.0%) から 4 種類の血清型が 13 株分離され *S.T* が最も多かった。枝肉・と体から分離された血清型のうち盲腸便と同じ型を示したのはそれぞれ *S.C*・*S.T* と *S.M* であった。

薬剤感受性試験ではいずれかの薬剤に耐性を示す血清型が 32 株中 28 株 (87.5%) 認められた。薬剤耐性パターンは TC・SM・SX の 3 剤耐性を示した 10 株 (*S.T*)、ABPC・KM・TC の 3 剤耐性を示した 3 株 (*S.W*2 株、*S.D*1 株) ABPC・TC の 2 剤耐性を示した 2 株 (*S.C*)、それ以外は 13 株が TC に単剤耐性を示した。

4. 考察

保菌調査の結果から県内のサルモネラ汚染農場の存在が明らかとなり、盲腸便と同じ血清型が分離された枝肉・と体もあることから、保菌豚からの解体処理時における汚染の防止が重要であると思われた。盲腸便やと体から多く分離された *S.W* や *S.T* は本県におけるサルモネラ食中毒の上位をしめる血清型でありヒトへの危害の可能性が示唆された。今回 *S.T* において DT104 特異遺伝子は検出されず、県内の豚に DT104 が浸潤している可能性は低いと考えられたが、分離株の 87.5% が何らかの薬剤に耐性を示したことから今後のサルモネラ菌薬剤耐性化の動向を把握していくことは公衆衛生上重要であると考えられた。